

Face to Face



TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター

No.33 2013年4月号

ザンビア

安全な妊娠・出産支援

初めて参加したKAIZEN大会と実施した研修についてご報告します。

p.2-4

カンボジア便り

2月に保健医療専門家がカンボジアへ渡航しましたので、ご報告します。

p.5

支援のゆくえ

皆様からいただいた大切な寄付金。寄付金から見る支援のゆくえを追いました。

p.5

ザンビア体験記

今年の春、ザンビアを訪れた7人の学生が、それぞれ感じたことを語ってくれました。

p.6-7

国際協力の出口戦略あれこれ

TICO 代表 吉田 修

国際協力にも様々なやり方があり、様々な終わり方がある。JICA（国際協力機構）から委託を受けて実施している「安全な妊娠・出産支援事業」も今年の9月末で終わりを迎える。今回は国際協力の終わり方について考えてみたい。（紛争や災害時の緊急人道支援は除く）

国際協力の目的は、端的に言うとな途上国の社会を良くすることであろう。その良い状態が事業終了後も維持されることを期待するのは当然のことである。持続可能性が重要視されるわけである。しかし、我々は所詮外国人であり、途上国に骨を埋めようと思える人はほとんどいない。従って我々が去った後のことも考えて事業計画を作る。

国際協力には幾つかのタイプがあり、持続可能性を左右するポイントを挙げてみる。（右上図参照）実際はこれらが混在した事業が多いと思われる。

1)の例として、TICOはコミュニティースクールを2つ建設した。この場合は既にあった学校にしっかりと先生やPTAが存在し、今後も適正に運営されそうな所を選んだため、うまく終了できたのである。

提供された施設や機材を適正に運営管理できる人材・組織が存在するか？	
1)ハード中心型	学校を作る／病院を作る／機材を送るなど
士気を高める動機付けがあるか、活動をサポートする体制があるか、活動費が確保されているか？	
2)人材育成型	地域保健ボランティアを養成するなど
効率の良いしっかりした組織ができたか、活動費が確保されているか？	
3)システム作り／組織運営支援型	救急隊創設／運営・支援など
技術移転する相手がいるか？	
4)マンパワー型	病院で医師として働くなど

1)2)3)の混合型としては、ザンビアで最初に取り組んだンゴンベ地区民生改善事業やルサカ市救急救助隊整備計画がある。どちらも徐々に支援を減らして、現在はTICOの支援なしに苦しいながらも自立的に運営されている。優れた人材としっかりした組織、様々な支援者のおかげであろう。JICAの委託事業もこの範疇に入る。終了後はザンビア政府が活動を引き継ぐことになっている。しかし、診療所やお産を待つ家の維持管理ができるだろうか、地域で養成された保健活動に関わるボランティア達の活動性を維持できるだろうか。

ザンビア政府は恒常的な資金不足／人材不足を抱えている。途上国の途上国たる所以である。だからこそTICOも支援しているのである。

日本でも同じかもしれないが、行政サービスに依存してられない。地域住民が社会活動に参加し自立的に運営する仕組みがないと持続できない。そこにはある程度の運営費も必要である。士気を高め活動を継続させるための収益事業がトレンドとなっている。TICOも地域の人々と模索しているが、そう簡単に儲かればとくに途上国ではなくなっているだろう。事業終了時に良い報告ができるよう努力しているところである。



よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）
徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。ンコンジェ小学校にて校長先生と子どもたちと。

ザンビア／チボンボ郡地域住民が支える 安全な妊娠・出産支援事業

田村幸根（保健医療専門家）



モンボシ地区の村から参加したカイゼンメンバー

KAIZEN(カイゼン)全国大会で成果発表！

首都ルサカにて、JICA（国際協力機構）主催のカイゼン全国大会が開催されました。会議にはSMAG（Safe Motherhood Action Group：安全なお産支援のためのボランティアグループ：スマッグ）が、モンボシから首都までバスで4時間かけて参加し、日頃の成果発表をする大変貴重な機会をいただきました。

なぜカイゼン？

お察しの通り、KAIZEN:カイゼンとは、「改善」のこと。「トヨタ方式」など製造業では有名な方法論だそうですが、製造業に限らず「ボトムアップ式」の「継続的な」「業務改善」のことを指します。今や世界で広く普及し、高く評価されています。

SMAGの発表タイトルは「良好なチームワークの構築」

そもそものはじまりは昨年9月にさかのぼります。カイゼン手法に則ってボランティアとして活動するSMAGが抱えている課題を見つけ出すところから始めました。す

ると時間管理能力、コミュニケーション不足が課題として浮かび上がってきました。そこで、まずはチームワークの強化に取り組むことがSMAGの円滑な活動につながるのではないかと話し合われました。具体的には、情報共有の要の場であるSMAG月例会議の出席率・遅刻率の改善に取り組んでいます。今回のカイゼン大会では毎月の出席率・遅刻率のデータを数値化し今後の目標を含めた成果発表を行いました。

発表までの2か月間は何度かメンバーで集まり発表の準備・練習をしてきました。発表の出来は上々とはいえませんが、ボランティアとして活動する彼らの成果をたくさんの人に知ってもらう機会になりました。



▲村にパソコン等の設備はなく、印刷したスライドの原稿をヘルスポストの壁に貼りつけ、発表の練習を繰り返し行いました。

した。また、他のチームから学ぶことも多かったようです。

上から指示されたことや決まっていることだけに取り組むのではなく、地域に暮らし地域で活動する自分たちだからこそ出来ること、克服できることがあると感じ取ってくれたメンバーもいました。

活動はまだ始まったばかり。自分たちの力で課題解決に向けて計画、実行し、評価するという一連のプロセスを少しずつ理解し始めているところです。この思考プロセスが習慣化されていくことが今後のねらいです。一層チームワーク力を増したカイゼンチームの活躍に乞うご期待！



▲大きな会議場、整った設備に緊張感が増します。メンバー6名の中から発表者として2名が登壇。

今日の献立、みなさんも考えてみてください！

村々のCHP（チャイルドヘルスプロモーター：子どもの成長促進員）と、SMAGを集めた総勢60名を対象に栄養セミナーを開催しました。



迷いながらも食品を色分けするボランティアさん

写真をご覧ください。ボランティアさんが食品を緑・赤・黄に色分けしています。この3色が何を意味しているかお分かりいただけるでしょうか。

3つの色からまんべんなく食品を選ぶことで栄養素をバランスよく摂取できるという考え方です。栄養の足りない子どもは、髪の毛が色あせ、まばらに生え皮膚が乾燥するといった異常がみられます。また、注意欠陥などの精神面にも影響は及びます。

ボランティアたちにとっては初めて聞くことばかり。夢中でセミナーを受けていました。他にも母乳の利点や離乳食のステップアップの仕方について質問を交えながら講師からわかりやすく説明していただきました。

4月には今回のセミナーで学んだ知識を活かして調理実習を実施します。実際に栄養を考慮した献立を調理・試食し、お母さんや子どもの栄養改善につながるレシピ作り、味を体感してもらいます。

- 2010年10月から始まった、ザンビア・チボンボ郡モノボンシにて安全な妊娠・出産のための環境づくりを目標としたプロジェクト。JICA（国際協力機構）から「草の根技術協力事業」として委託を受けています。

「施設分娩で安全にお産をしよう」

SMAGが地域で奮闘中！

昨年9月から4回の連続講座として実施しているSMAGリフレッシュ研修。9月・11月に引き続き今回は第3回目の開催です。

ザンビアでは、妊婦の多くが医師や助産師といった専門職の介助なしに出産し、不衛生な状況や知識不足が原因で母子の命が危険にさらされています。そんな

中、村のボランティアであるSMAGは「施設分娩・妊産婦健診受診の励行」を住民に啓発し、日々奮闘しています。

連続講座の目的は、曖昧な知識を確実にしていくことですが、第2、3回目の研修では知識を蓄積してきたSMAG自身が「地域でできること」を具体的な活動に落とし込むことを重点目標に据えています。具体的な活動の一つが、「妊産婦の家庭訪問」です。

家庭訪問によりこれまで以上に多くの住民に正しい知識がいきわたり、適切な行動がとれるように促していきます。

一歩ずつですが、SMAGの健康を支える活動が地域全体の意識の変化に結びついていきます。



緑	身体の調子を整えます	ビタミン、ミネラル、食物繊維など	野菜、果物、芋類
赤	血液や筋肉をつくります	良質のたんぱく質、脂質、カルシウムなど	肉、魚、卵、豆
黄	体を動かす力になります	糖質、脂質などの供給源	メイズ、ご飯、パン、油脂、砂糖

ここで栄養セミナー講師のご紹介♪

チョラ・イブリン先生

(ンゴンベコミュニティスクール副校長)

チョラ先生とTICOはザンビアでは実はなじみの仲。

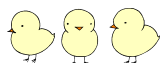


TICOが初めて首都ルサカで行った女性の自立支援のための栄養改善教室のスタッフだったチョラ先生とは、13年来のお付き合いになります。今では女性のためだけでなく、ンゴンベコミュニティスクールとして子供たちが通う小学校までに成長。ザンビア人の手により、自立して活動をしています。

▲「モンボンシの人々に栄養について知ってもらえる機会を持てることは私にとっても嬉しいことなのよ」

チョラ先生は、現在その小学校の副校長先生なのです。こうした経緯もあり、かつてンゴンベで日本人スタッフが作成した栄養素の教材（上記の3色栄養素教材）を今でも活用してくれているのです。

彼女は看護師というバックグラウンドを持ちながら栄養学にも長けており、2009年に同じくモンボンシで行った調理実習の際にも講師として活躍しました。今回は2回目のモンボンシ訪問。こうして緩やかに、長く交流を続けていける優秀な人材に支えられているおかげで、TICOがザンビアで継続的に活動ができているのだと実感しています。

回転基金ローン制度開始！

現在、SMAGの持続的な活動を支援するため、養鶏や大豆栽培支援ローンといったIGA（Income Generating Activity：収入創出活動）を行っています。さらに、新たなIGAである回転基金ローンを導入するため、昨年の11月に各地域の代表者と会計それぞれ各1名のSMAGを対象に研修を行い、今年の1月から導入を開始しています。

回転基金ローンとは？

その名の通り、資金を繰り返し運用することで基金の総額を増やしていくローンの仕組みです。

基金の初期総額は、グループメンバーの入会金と各メンバーの毎月の拠出額によ

り決まります。基金を各メンバーに貸し付け、各メンバーはその貸付金を元手に各々のビジネスを1か月間展開します。

1か月後、貸付金に利子を上乗せした額を基金に戻します。投資⇒貸しつけ⇒ビジネス⇒利子を上乗せして回収⇒再投資というサイクルを1か月ごとに繰り返し行っ

て基金の運用を行い、安定的なローンの仕組みを構築していきます。

既に養鶏・大豆栽培ローンという貸し付けの仕組みを導入しているのですが、天候や病気などの影響を受けやすく、各々のローン返済が困難になるリスクがあります。そこで回転基金ローンという仕組みも導入することで、上記のようにローン返済が困難になったときでも、変わらず安定的に資金を創出できるようにすることが今回の目的です。

なお、回転基金ローンとは別の仕組みになりますが、毎月各メンバーは一定額をSMAG基金として積み立て、貯蓄していく予定です。

SMAG基金に対しては、TICOからも毎月少額の支援をしていきます。この基金は、SMAGが地域で活動していくために必要となる文具や自転車救急車のメンテナンス代などに使われます。



会計簿のつけ方を教わります

百聞は一見に如かず**TICOザンビア事務所/事業地を訪れていただいた方々は約40名！**

2012年4月から2013年3月までの間に、TICOザンビア事務所／事業地を訪れていただいた方はのべ40名近くに上ります。

会報31号に感想を寄せてくれたTICOユースを始めとする学生のみなさんや、下記に活動報告が載っているIFMSAのみなさんなど、途上国での開発や国際協力に興味を持つ学生が大多数です。

特筆すべきは、2月に徳島新聞の現地取材（平成24年度JICA地方マスコミ派遣）が

入ったこと。ぜひ、同封されている記事を読んでみてください。

百聞は一見に如かずとはよく言うもので、どれだけ私たちが写真を使い、言葉を尽くして会報で、ブログで、ホームページでザンビアのことを伝えようとしても、現地に足を踏み入れ、五感を通じて得られる情報量にはかないません。

ぜひ一度、ザンビアへお越しください。村人たちと歓待いたします！

瀬戸口千佳（業務調整員）

横浜市立大医学部看護学科のみなさん

猫目線

今回で7回目を迎える猫目線。そろそろ名前を覚えていただいたでしょうか。猫のチャイです。

みなさん、遠くにいる人を呼びたいときってどうしますか？近くまで走っていく、大声で名前を呼ぶ。でも走っていくにも大声で呼びかけるにも遠すぎる位置に相手がいる場合は？

ご主人が村を訪ねたある日のこと、用のあった人がすでにヤギを放牧させるために出かけてしまっていたことがありました。携帯電話を使おうにもその人は携帯電話を持っていないし、そもそもご主人のいる場所は圏外。困っているとその家の人が「今から呼ぶから大丈夫」と事もなげに言うのです。どこを見渡してもヤギの姿・人の姿なんて見えないのにどうやって、と不思議に思っているご主人の耳に、甲高く長い旋律が聞こえてきました。そう口笛です。しばらくすると大量のヤギとともにお目当ての人が現れました。また別のある日、ご主人が村を歩い

ていると遠くから口笛の音が聞こえてきました。一緒に歩いていた村人はしばらく耳を澄ませた後、再び何事もなかったように歩き始めたそうです。彼らには自分を呼んでいる口笛なのかどうかを聞き分けることが出来るんですね。果てしなく（ご主人にとっては「気の遠くなる」）広い大地で生活してきたからこそその通信手段。私の「にゃー」という鳴き声もそれぞれ響きで意味が違うのですが、ご主人にはあまり伝わっていないようです。

にゃー。

IFMSA-Japan（イフムサ：国際医学生連盟-日本）の学生たちが、2泊3日の日程でザンビアのモンボシにてビレッジステイを体験しました。それぞれのメンバーから感想が届きましたので、ご紹介いたします。

中村 佳夏

浜松医科大学医学部医学科新3年

私が滞在させて頂いたご家庭のお父さんは、CHW(コミュニティヘルスワーカー)とSMAG(安全なお産支援のためのボランティアグループ)のメンバーを兼任している方だった。私が家にいる間はひっきりなしに村の人々がやってきて、自分や家族の体調が悪いことをそのお父さんに相談していた。このように、村人の健康のために責任感を持ってボランティアで活動している姿を見て、とても心を打たれた。金銭的、物質的な問題を自分たちの力で少しでもカバーして村人の健康を守ろうという、力強さが彼からは伝わってきた。彼を見て、私はこんな医師になりたいとさえ感じた。

また、そのご家庭には7人の子どもがいた。英語を話せない子も日本語の単語をたくさん覚えてくれたこと、お別れの時に彼らが使う2つの現地語と英語の単語表を作ってプレゼントしてくれたことが特に嬉しかった。どこの国の子どもであっても、子どもは愛おしく、守られるべき存在であることを、身をもって感じた。

滞在させて頂いた家には、灯りも水道もなく、周囲には道と呼べるような道さえなかった。子どもたちはボロボロな洋服を着ていた。私はこのような状況を必ずしも不幸とはいえないと思う。わずか3日間の滞在ではあるが、そこで村人たちの平和であたたかい、当たり前の生活が成立していることも垣間見たからだ。

このような経験を経て、ステイ中だけでなくその後のザンビア滞在中にも、自分が医療者になったとき何ができるか、できないか、何をすべきか、するべきではないかについて、悩み考えるきっかけとなった。

箱山 昂汰

北海道大学医学部医学科新2年

私のステイ先のご家庭のお父さんはSMAGのメンバーで自分の村の妊婦さんたちの健康を守っていた。私は、彼の仕事に付き添って多くの家々を回り、たくさんの人と話すことができた。ある家のお父さんは、子供が18人欲しいと話しており(奥さんは3人)、次産まれる子が男の子ならKota(コウタ)と名前を付けてほしいとお願いした。快く引き受けてくれて、本当に嬉しかった。

学生体験記 in ザンビア Vol.1

中でも心に残っているのは、泊めてくれたご家庭の長女さんである。とても素敵な女の子で、私は恋に落ちた。最後の夜、満天の星空のもと、たき火を囲んで2人でいろんなことを話した。その子も私のことを気に入ってくれたようで、“あなたはカッコイイ”と言ってくれた。女の子にそんなことを言われたことなど産まれて初めてであり、どきどきしてしょうがなかった。寝る前に、“私を忘れないで”と言われた。もちろん、このさきずっと忘れない。ありがとう。

岡村 優真

聖マリアンナ医科大学医学部医学科新5年

私は、村での滞在で表と裏とも言えるような経験をしました。

初日に泊まった家は車から降りたあと4時間以上歩き、辺りが暗くなってようやくたどり着くことができました。後どのくらいでたどり着くのか分からないし、



▲ビレッジステイのようす

街灯もない、道無き道を歩くことは恐怖でした。

その後夕飯をいただきしばらくしてから、突然「君は今回のステイでなぜお金を払わないのか。払うべきだ。」と言われました。思いもしない質問にきちんと返答することができず、翌朝から食べ物をいただくことが申し訳なく感じ、食事をあまり口にすることができなくなってしまいました。

2日目は朝から夕方まで挨拶回りをしました。ほとんどの住民から水、病院、学校の3つの不足ばかりを聞かされ、正直飽きてしまいました。昨晚のこともあり、ビレッジステイに参加したことをとても後悔していました。

2日目の夜は初日とは違う家に泊まることになりました。その家は子供が全員自立していて、夫婦2人暮らしでした。心身ともに疲れきった私に2人は祖父母のように優しく接してくれ、自分たちの困っていることばかりを話されていた日中とは違い、私自身や日本のことに興味を持って質問してくれたことが本当に嬉しかったです。

2泊3日という短い期間で、村では遠い日本からやってきた学生を歓迎してもてなしてくれる面と、お金が無いという切実な問題に立たされている面がある事に気づかされました。この2つの面を両方とも見ることができたことは、本当に充実したビレッジステイであったと言えると思います。

新 真大

千葉大学医学部医学科新2年

料理はかまど、トイレは庭に穴が掘ってあるだけ、日が沈めば一面真っ暗・・・日本の現代の生活とかけ離れた生活がそこにはあった。しかし、私はそこで貴重な時間を過ごすことができた。

村の人々はみんな優しく気さくな人ばかりだったが、英語が拙い自分にはどうしても言語の壁を感じてしまう瞬間が何度もあった。私のステイ先の母上は全身から優しさが溢れ出るような方だった。この母上と同じ家に泊まった仲間と一緒にザンビア料理を作ったり、洗い物をしたり、朝日をみたり、電灯のない中、日本とザンビアのこと語り合ったりした。最後の日、私は自分が聞きたかったある質問をした。内容が抽象的で、そして本心の答えが聞きたかったので、自分がどんな思いで聞くのか自分のこともしっかり話す必要があった。一生懸命自分のことを伝え、そして聞きたいことを投げかけると、母上は優しく真摯に、包み込むように話を聞いてくれた。この時私は「本気で伝えようとすれば、たとえ言語の壁があろうと、聞く意思がある人には届くんだ。」ということを感じた。

原 聖

熊本大学医学部医学科新2年

首都ルサカから車で3時間走って村の入り口まで行き、そこからはSMAGのデービスさんと一緒に2時間半かけて畑と草むらに囲まれた畦道を歩きました。道すがら、裸足で小川を渡ったり、蟻の大群を飛び越えたりする合間に、デービスさんとは様々な話をすることができました。翌日の予定のことから始まり、農村の衛生状態、教育環境、農業や牧畜について、日本とルサカの生活の違い、倫理観や美意識、果ては宗教について。デービスさんは30代前半ですが、穏やかで、外国から来た年下の人間に対しても礼儀正しく接し、物知りで、物事を深く考え理性的に行動する、一言で言えば僕にとって非常に尊敬できる方でした。

僕は1986年生まれです。生まれたときから身の回りにはモノが溢れ、物心つくころには自分の体の一部のようにモノを使いこなしていました。ザンビアの農村には電気や道路も含めて圧倒的にモノが足りず、日本の生活に慣れた僕からするとおそろしく不便でした。人間は、新たに何かを得ることを望むよりも、既に持っているものを失うことを恐れる気持ちの



学生体験記 in ザンビア Vol.2

ほうが強いと言います。僕にとっては、電気がない生活は、電気を「失う」ことだったのです。しかし、そこに住む方々と（ほんの二晩ですが）暮らしを共にした限りでは、普段の生活の中でモノの不足に特段苦しめられている様子はありません。常に時間に追われるような生活を強いられている日本人としてはむしろ、彼らのスローライフが羨ましく思える瞬間もありました。

彼らは現状に対するある大きな不満を抱えています。それは医療と教育の不備に対する不満です。農村及びルサカのスラム街の状況と、ルサカの富裕層の人々を比べて僕が最初に思ったことは、単純に、あまりにもフェアではない事態が生じている、ということです。経済が存在する以上、富める者と貧しい者がいるのは当然ですが、ここまでの苦しい生活を強いるのは、なにか正義に反しているのではないか、ということを感じました。

伊藤 浩平

札幌医科大学医学部医学科新6年

出発前に考えていたアフリカの現状というのは、生活に困難、電気も水道も無く学校も遠くて大変という印象が強かったです。しかし、実際に現地で生活してみるとその困難な環境そのものが当たり前であり、その環境の中で当たり前に生活している事に驚きを感じました。

そして、その驚きを感じる事自体に自分の不甲斐なさを痛感しました。何よりも自分が日本で生活している環境は恵まれて過ぎていると思いました。村を1周し、いくつかのお宅を訪問させて頂きましたが、それが村の現状の全てではなく、もっと貧しく、生活が困難な方もいるのではないかと思います。

新月の夜の星空と、満月の月の輝きが自分の中で1番印象深かったのは否めません。派遣を通して「自分の知りたかった事実を知った」というより、「自分の知らなかった現実を知れた」ことが大きかったように思えます。

このような貴重な機会を与えて頂きありがとうございました。ザンビアに行く事がゴールではなく、ザンビアに行った事がスタートになるように、自分の将来、進路も含めて考えて行きたいと思います。



ビレッジステイのようす

●紙面の都合上、一部を割愛してお届けいたしました。TICOブログにて全文を掲載しておりますので、どうぞご覧ください。
●<http://www.tico.or.jp/aboutTICO/activity/blog.html>



ワークショップのようす

2月25日から27日の3日間、カンボジア国プノンペン市とスヴァイリエン州を訪問してきました。今回は、協働団体である香川県の公益社団法人セカンドハンドが考案している、次期プロジェクトの事前調査の専門家として参加しました。

関係者からのヒアリングの他、プノンペン市民病院とプノンペン市西部のポチェントン病院の救急医療担当者を対象に、「大血管疾患の救急」と題したワークショップを行いました。大血管疾患として、脳卒中、心筋梗塞、急性大動脈解離、肺塞栓の4つを取り上げ、それぞれの症例提示とクイズを実施した他、この2つの病院では実際にどのような治療しているかについて、話をしてもらいました。結果、脳卒中や心筋梗塞は最近カンボジアでも最も頻繁にみられる救急疾患となっているが、十分な治療ができる病院は限られていること、急性大動脈解離や

肺塞栓は経験不足や検査手段の乏しさから診断がついていないことが浮き彫りになりました。それぞれの疾患ごとに、限られた医療資源でどのように対応することができるか話し合いました。

その後行われたミーティングでは、両病院の職員の給与や救急車のガソリン代が政府から支払われなかったり、支給が遅れたりしている現状を聞きました。現在、カンボジアの経済発展はめざましく、高層ビルの建設が進み、市中には高級車が多数走り、ベトナムとの国境にはカジノや巨大ホテルが建ち並んでいます。その一方で公的医療機関の事情は全く好転していないことに非常に大きな矛盾を感じました。我々にできることは限りがありますが、救急患者の数は増える一方で待ったなしの状況です。

今後とも有効かつ持続可能な支援のあり方を探っていきます。



関係者からのヒアリングのようす

支援のゆくえ ～寄付金を通じて～

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。皆様からいただいたこのご支援は一体どのようにして、役立てられているのでしょうか。

今回は、寄付金を通してお話したいと思います。寄付金は無指定寄付と指定寄付に分かれています。無指定寄付は、TICO全体の活動に幅広く使われます。一方、指定先寄付は、寄付金を何に使用して欲しいか寄付する方が選ぶことができます。例えば、「ザンビアの子どもたちのために使ってほしい」といった場合には、出来る限りその希望に添う形で寄付金として使わせていただきます。では、実際にどのようにして支援内容が決まっていくのでしょうか。

ザンビアにいるスタッフが現地にてニーズ調査をします。ただ物をあげるだけではなく、支援をすることによって本当にその人達のためになるか、持続可能な支援を目指します。ある程度の支援内容が決まれば、日本の事務局とザンビア事務所が協議し、支援内容が決定します。これまで、学校を建てる資金の一部、教科書の支援、黒板やチョーク等を各学校へ寄贈しました。そして、また来年度末に森山小学校にて、お礼を兼ね寄付金がどのように使われたのかについて報告させていただく予定です。ザンビアのこの小学校の校長先生から、「黒板とチョークがこの学校にあることは、シマ*と美味しいおかずがあるようでとても嬉しい。」と森山小学校へお礼状が送られました。生徒さんが一生懸命に空き缶を拾って町をキレイにし活発な奉仕活動に

取り組むことで、遠く離れたザンビアの小学校へ必要な支援を届けることができました。国際協力は、お互いが幸せになることが第一条件、これからも支援のゆくえをしっかりと考え、活動していきたいと思っています。

今後も皆様から頂いた大切な寄付金の使い道については、ブログ、ホームページ、会報や年次報告書等でご報告させていただきます。

これからも温かいご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

*シマ ザンビアでの主食 白トウモロコシを粉にして、水で練って蒸したもの。日本で言うところの白ご飯。

先日、徳島県吉野川市立森山小学校の贈呈式に出席させていただきました。毎年、6年生が中心となり学校や保護者の方々、そして地域の方々と一緒に空き缶を集め、その空き缶を売った収益をTICOへ寄付してくれています。平成24年度はなんと50,000缶以上もの空き缶を集めたそうで、その努力と善意の詰まった寄付金をしっかりとお預かりしてきました。それではこのザンビアの子どもたちのための寄付金はどのようにして使い道が決まっていくのでしょうか。



▲森山小学校からチョークが寄贈されたことを先生から子どもたちに伝えました。先生の後ろにある黒板は前回寄贈されたもの。

ザンビア募金総額発表！
361,480円（3/31迄）

皆様からのご支援はザンビアでの様々な活動に有効に使わせていただきます。使途につきましては、次号のFace to Faceでご報告させていただく予定です。引き続き、皆様からのご支援をお待ちしています。

※寄付先をザンビア支援と指定下さい。

事務局長 福士庸二のつぶやき

うまい空気は、 どこに？

春になってマスクをした人たちが、一段と増えたように思う。昨年末から今年にかけて、インフルエンザが流行しマスク姿の人が多かった。加えて、中国から流れてくる大気汚染物質PM2.5の影響も心配され、さらには、スギ花粉の季節の真っ只中である。こうなると、年中マスクは手放せなくなってくる。

TCOのスタッフの中にも、花粉症の者が何人かいたが、ザンビアに行くとその症状が嘘のようになくなるという。アレルギーを起こす花粉が存在しないからなのだろうか。しかし、そのザンビアの首都ルサカでは、開発が進むに連れものすごい勢いで車の数が増え、数年前には考えられなかった大渋滞

が起きているという。ルサカの大気汚染が話題になるのは間近なのかもしれない。

地球の至る所で開発が進み人々の生活は豊かさを増す一方で、環境や生態系が破壊され大気汚染はますます進み、呼吸するにも不自由な世の中になってしまった。

前号で私がサイクリングの愛好者であることを書いたが、マスクをしてのサイクリングは辛い。坂道を登るには、大量の酸素が必要なのである。

坂道を登り切ったあとは、うまい空気を思いっきり深呼吸してみたいものだ！



▲多くの車でにぎわうルサカのショッピングセンター

ご支援ありがとうございました

TCOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方

ヒラオカ薬局募金箱、石岡ミサオ、井上茂樹、大多和通夫、加浦由貴、河合純子、金納千晴、坂山英治、坂本、PlanB募金箱、さくら農園、さくらcafé募金箱、さくら診療所募金箱、鳴門市賀川豊彦記念館、高木クニ子、西愛正、白石勝美・久代、副島光江、高井美穂、高島百合、ダスキン川島、正木金一、田淵規子、中田隆子、橋本伸子、蓮井孝夫、花井郁恵、平岡仁美、藤井節子、原田恵子、船津まさえ、後藤芳光、細谷孝子、堀俊明、松田千文、桜井一夫、松村茂、山田、渡辺一弘、わらびの会、近森由記子、福士庸二、吉田修、匿名7名

佐藤知里、塩井英子、塩田勉、白山靖典、関野、高田智子、田淵幸男、田淵規子、寺口カミコ、松島拓、高島百合、中村佳夏、中野貴志、ヒラオカ薬局、森山庄八、和田快、金納千晴、佐藤三千子、坂東正章、秋月益子、松田千文、大西和賀、長野茂夫、白石吉彦、K's Pet Clinic、北島コーポレーション、匿名1名

新たに入会された方

伊藤浩平、岡村優真、原聖、新真大、石井遼子、箱山昂汰、増田智里、近森由記子

●2012年12月1日～2013年3月31日

●順不同、敬称略

会員を更新された方

岩田祥三、岡真澄、工藤瑠沙香、佐藤晃、

TCOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO

銀行振込 — 四国銀行 山川支店（店番号344）
普通 0199692
特定非営利活動法人TICO
代表理事 吉田修
カナ入力の場合は、トクヒ）テイコ

募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからお買い物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧ください。

書き損じはがきを集めています。

TCOへの入会方法

会員となって資金面からもTCOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター“Face to Face”を毎月お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000

正会員 ¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649

加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。

なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧ください。

TICOニュースレター Face to Face 第33号

2013年4月発行 発行人：吉田 修
編集：近森 由記子

特定非営利活動法人 TICO 事務局

〒779-3403 徳島県吉野川市山川町前川120-4

電話：0883-42-2271（平日 9:30～18:30）

メール：info@tico.or.jp / ウェブサイト：www.tico.or.jp